Voice 7

フォトジャーナリスト
佐藤 慧

Move on！ 前へ、前へ

眼前を埋め尽くすがれき。つい数日前まで誰かの日常だったものだ（陸前高田市）

マリベスさんは、夫と5人中4人の子どもをこの台風で失った（フィリピン）

子どもたちは元気いっぱいの笑顔で歓迎してくれた（フィリピン）

<Profile>
さとう・けい
1982年岩手県出身。studioAFTERMODE所属フォトジャーナリスト。アフリカやアジアの紛争、貧困の問題を追いながら、国家、人種、宗教を超えて人と人との心のつながりを探求し伝えている。2011年世界ピースアートコンクール入賞。著書に『Fragments 魂のかけら 東日本大震災の記憶』（かもがわ出版）他。

その光景に既視感を覚え、30度以上の気候にもかかわらず悪寒が走った。あらゆるものが形を失い、尊厳をはがされ、真っ黒ながれきと化していた。フィリピン東部のレイテ島は、台風の上陸によって粉々に砕かれていた。鼻腔の奥にうずく遺体の臭い。それは3年前、岩手県陸前高田市で嫌というほど嗅いだ臭いだった。

2011年3月11日、比喩ではなく、日本が揺れた日。その日、僕はアフリカ南部の国、ザンビアにいた。2月中旬からコンゴ民主共和国の取材に出ていた僕は、隣国ザンビアのゲストハウスで、次の行動に向けて準備を進めていた。

コンゴ民主共和国。どれだけの人が、その国の場所と、血塗られた歴史を思い浮かべることができるだろうか。大航海時代から続く資源争いは、この国を絶望に落とし入れた。この20数年の戦乱の被害者は500万とも、600万ともいわれる。腐敗した政権は賄賂を取り締まることのできない社会を生み、いまだ銃器を持った武装勢力や、権力を乱用する警察、軍隊による搾取は後を絶たない。

取材中、何度も警察や軍隊に捕まっては賄賂を払った。カメラを持ったジャーナリストは、彼らからしたらスパイと大して変わらない。僕を牢獄に放り込む理由など、いくらでもでっちあげることができるのだ。

しかし、そんな憂鬱な社会の中でも、人々はたくましく生きていた。ごみに埋もれたスラムでは、子どもたちが元気に駆け回り、道端ではベルギー支配時代の名残か、露店のベルギーワッフルが香ばしい匂いを漂わせていた。とはいえ、滞在中にも反政府勢力のテロが起こり、僕自身、政府のシークレットサービス、ANRに常に後をつけられていた。潮時を感じ、国境を越え、ザンビアの静かなゲストハウスで朝を過ごす僕の耳に、あのニュースが飛び込んできたのだ。

世界中、どこに行っても人々は生命力にあふれている（コンゴ民主共和国）

「東北で地震があったらしい」

同じ宿に滞在していた客から聞いたその言葉は、朝の静けさをたたき割るほどの衝撃を持っていなかった。何といっても地震大国の日本、僕の生まれた岩手県の沿岸は特に揺れやすく、震度4、5の地震は何度か経験していた。しかし、次の瞬間、目に飛び込んできた日本の映像に背筋が凍った。真っ黒な津波が市街地を襲い、一瞬にして全てがのみ込まれていく。前代未聞の震災が起こったのだと瞬時に理解し、とっさに僕の脳裏に浮かんだのは、岩手県沿岸の街、陸前高田市で暮らす両親の安否だった。携帯電話はつながらず、無機質な機械音がむなしく響いた。

緊急帰国を決意し、東北へ向かった。父の無事を確認した僕は、消息の分からない母の行方を追った。ファインダーの奥に映る光景には、記憶の中の街の面影はどこにもなく、ただ一面、がれきに埋め尽くされていた。その奥底から引き上げられる遺体の数々は、つい数日前まで、呼吸し、感情を持った人間であったという事実を感じさせなかった。あまりにも想像を絶する光景に、僕の脳はまひしていたのかもしれない。遺体安置所を巡る。数百を超える棺をのぞき、そこに愛する人の顔がないか黙々と探す。1カ月後、やっとのことで見つけた母は、川の上流9キロ地点のがれきと泥土の下に眠っていた。

突然の愛する人との死別は、僕の人生を大きく揺るがした。死というものは、準備ができている、できていないにかかわらず、無慈悲にやってくるものだ。この人間というちっぽけな命を生きる理由を求め、多くの場所に足を運んだ。陸前高田市の取材を続けながらも、紛争にあえぐ南スーダンやシリアを訪れ、同じように災害に直面したタイの洪水なども取材した。理不尽な死に触れ、より死というものが、つかみどころのないものとなっていった。なぜ人は、生まれながらにして死というものを背負いながらも、今日を生きるのだろうか。

2013年11月、大型台風「ハイエン」がフィリピンを襲った。高潮は6メートルを越え、あの津波と変わらないほどの被害だ。躊躇する間もなく、僕は航空券を握り締め、成田へと向かった。

レイテ島のタクロバン空港は無残な骨組みとなり、水や食料、医薬品の足りない被災地では、多くの遺体が路上に転がっていた。全身に疲労を覚えながらも、数日間そんながれきの中で過ごした。僕を迎え入れてくれた人々は、みな大切な家族を失っていた。それでも、大人も子どもも優しさを失うことはなく、すでにその目は前を見ていた。「Move on, Move on（前に進み続けるんだ）」と。

なぜ、そんなに強いのだろう。彼らはどんな状況にあっても、家族や隣人との時間を大切にする。そんな何気ない時間が、彼らの生きる気力を育むのだろう。本当に大切なものは心の内にあるのだ。Move on ―限りある命を、最大限に生きよう。